

第四章 國土計畫と商店街

第一節 日本の國土計畫の形式

我國の國土計畫が獨逸の Coppin であり得ない事は當然である。

國土計畫とは一つの國家がその時、當面せる事情に對し總力を揚げて對處せんとする國土態制である。

此を單に國土諸力の綜合と解し「國土計畫」に一つの定型があると信ずる如きは迂愚も甚し⁵⁰。

獨逸はベルサイユ條約を破棄する必要があつた。

此の爲には何としても世界を敵として一戦する必要があつた。

その必要故に自由主義は揚棄せられ、又その必要に備ふるのみの再軍備計畫として國土計畫が完行せられたのである。

アメリカも國土計畫を有つてゐる。

それはアメリカの國情が求めたものであるが故に、同じ名を冠しつゝ獨逸の國土それと冬と春以上の差異を示してゐる。

我國の國土計畫は我國の現状からのみ産れる。

恐らくそれは獨逸程の「鋼鐵の計畫」ではないであらう。

然らばそれはアメリカの如き春風胎蕩たるものか。それも否であらう。

我々にベルサイユ條約破棄の必要はない。

然しさればとてアメリカの様なゴールドラッシュにもない。

自からその中間の性質の國土計畫であらう。而してそれは又、日本的特徴として獨逸的形態へ移行して行く形を採るのではあるまいか。

従つて日本の國土計畫の形式については獨逸を最大限とし現實との間に目盛りを造つて置けばその時期時期に於けるそれが彷彿とし得られる事になるであらう。

國土計畫によつて支配される可き小賣商店街も、その條件に於て推定されるより仕方がない。

第二節 獨逸の場合

先づ小賣商に對するナチの方針は黨綱領第十六條に示されてる。

第十六條 我等は健全なる中産階級を創設して此を維持し、大百貨店を即時、市町村化し、

且つ此を小生産業者へ廉價に貸與し、國家各支那又は市町村における物品調達に當り、總べての小生産業者を、最も繁盛に顧慮すべき事を要求す。

中産階級を基礎として制覇をとげたナチとしては當然の事ながら、結局強權主義の留意しなければならぬのは此の中産階級であらう。

たゞ中産階級の中でも商業人口丈は自から没落す可き理論にある。此れ丈はやがて解消の止むなき事は自明であるが、ナチは此れに順序を附し先づ、小數受益者の百貨店を左右し、中産商業の處理を最後にまわした。

而してむしろ一九三三年には小賣商業保護法を出し人口三萬以上の都市の商業を許可制とし既存の商店を保護する形をさへ示した。

此等の理念がいかに國土計畫の中に反映したかは明瞭でない。

國土計畫はあく迄「土」の秩序計畫であつて、しかもその課題が強兵、食糧資材の獨立、防空國土の建設であり、方法論の重點が農村の建設、大都市及工業の分散と云ふことにあるので小賣部門は主導的なポストには顯はれて來ない。(此はおよそこの國土計畫策定要領を見ても同様である)。

たゞ大都市の人口増加を抑制する暫定措置として商業許可制が働いてると云ふ消極的な顯はれ方をしてる丈である。(尤フエーダアの有名な人口二萬の規模都市の中の職業構成計畫には商業人口が明瞭に一定の比率で組み込まれてある)。

第三節 我國の場合

我國の小賣商業が好むと好まざるにかゝはらず國土計畫前に於て既に大きな壓力に面して居る事は皆知る如くである。來る可き國土計畫が此に拍車をかけるであらう事は豫知出来る。

而してそれが百貨店を抑制し商店街を「國家配給機關」の代行物として全市同業商業組合と、商店街商業組合を経緯とし構成せしめんとする事は想像出来る。

而して各店舗の資本及人的要素が在來の各戸の小單位から全商店街の企業合同に迄進む可き

事は瞭然である。恐らく最後には完全に全街合資による百貨街になるのであらう。

その時の構造が街路に沿ふてアーケードを有つものである事等も眼に見る如くである。

たゞ、その時に於てもそれは現在の「盛り場」性を有するものであらうか——その問題が残る。

自分は商店街の有する希臘以來の隣保的な市民クラブ的な價値を高く買ふものである（往古は市場廣場）。

恐らくは此れあるが爲我々は隣保意識（やがて此れが國家心に迄積分される所の）の萌芽を有し得るのではないかとさへ思つてるのであるが、或は此は充分に市場化し、現在の商店街の感樂性に代る新しい健全な盛り場が此れに附帶して發生するのもかも知れない。

此れは永らく商店街の存在を樂しんで來た我々としては淋しい極みである。

ボアが「我々の先祖は市場に群れる事を樂しんだ。

市場は古代市民の議會でありクラブであつた。古代市場は今日の商店街である。市民は群集を好む。

快よき群集の、緩慢なる祭典である商店街が市民の吸引中心たるワケである。

かるが故に商店街の價値はその社交性にある」と讚した。

その言葉を贈つて長き別れを措しみ度い。

ナチさへもその都市建設要領の中で

「中世の人々は町の廣場で喋りするのを樂しんだ。

町の人々の心のつながりはそこで結ばれた。いつの間には資本主義の走狗交通機關が此れを粉砕した。

新しい都市計畫の留意はそこになければならぬ」とのべてる。

その廣場の再現は商店街が引きうけて居たのである。

長き光榮の任務だつたと云はざるを得ない。

x

以上は然し商店街内部の變化である。國土計畫の當然の動きに従つて、受く可き、商店街界全體の影響はどんなものであらうか。

先ず國土計畫は

大都市の人口抑制——進んでは工業分散——地方都市の振興——地方消費の確立

を目圖とする。

此は明である。大都市の人口抑制の爲には或種の工業及商業の新設禁止は當然想像出来る。獨逸では先に云ふ如く小賣商保護法により

一、必要なる内知識が證明せられた場合

一、提議者が人格的に信頼し得る事

一、一般的設立禁止の例外許容がその地方の同一商業部分の過剰を來さぬ事

以外の場合には店舗の新設、擴張移轉を禁じて居る。

我國に於ても國土計畫は大都市に於ては新しき商店街増設を希望しないであらう。

而してその反動として素晴らしき僥倖をうけるのは地方小都市でなければならぬ。

地方小都市はその能力に應じ工業を附與せられ強化せられる。

此れによつて地方の商業が振興せられる事は云ふを俟たない。

たゞ若しその場合工場内購買組合が發達する様な事があれば、それも可成りのブレイキをうけるワケであるが、恐らく新しき施設により既存中産階級を崩壊せしめる事は極力さくる必要があるので、此れもその購買組合をその市商人に引き受けせしめる方法により保護されるので

はないかと思はれる。

殊に自分は商店街が完全市場となる以前に地方商店街に一つの黄金時代が来るのではないかと想像する。

それは國土計畫當然の仕事として國民の郷土定着化を圖りその爲に國民に土地と家屋を所有せしめ又地方にパンと消費の中心を與へる。そうした事の爲に地方一々に強力な消費中心たる商店街を確立せらるゝのではないかと思ふ。

尤、大都市主義は廢棄せられてしまつてゐるので人口二〇萬以上の都市は想像されないであらうが、それはそれに代へて次の様な形式で積分的な人口を有つ事になる。

即人口は交通機關の強統制によつて夫々の中心に保證結集される。

中心都市の結集半径は三〇軒、第二都市は一〇軒、第三都市は五軒位と想像される。

かく組み立つる時は、中心都市は集團人口二〇萬であるが實質人口一五〇萬位な人口の中心となり得る。

かゝる中心が三〇軒の半径を以つて（現在大體然り。但し現在にては此の交通が保證されてゐない。第二第三都市乃至それ以下の聚落は隨意、他のより強大なる都市に吸引されてゐる。

その爲に地方中心が強力とならず魅力を備へない) 全國に分布される。

それは防空よりも、國民保健よりも國民の郷土定着化から云つても理想に近いものである。

その結果新しき商店街の再分布が行はれる——事になるのである。

ナチ計畫には強權による國民郷土化はあるが此の人口の積分構成による大都市價值再現による郷土化の方法が缺けて居る。

此の點試案として誇る所以である。(尤、こゝに交通調整と云ふ難事業が前提となる)。

第四節 結

ひ

以上が國土計畫に於ける商店街の推定し得る姿である。

現に國土計畫前夜としての都市計畫は大都市に於て

住居専用地區——工業専用地區——空地々區

等の制度により大都市の形に整理を加へつゝある。更には又「交通専用道路」は道路の兩側に建築線の後退乃至風致地區の設定等により家屋の接續を防がうとして居る。

又當然考へ可き問題としてせまつてゐるのは「大都市中の商業人口の整理の必要」に伴ふ「地

方の新興工業都市の人口構成」である。

此の新興工業都市の商業人口はどこから來るのか。

若し夫れが周圍の農村から轉化されて來るとするならば、おびたゞしき新商業人口が生れる事になる。それでは大都市の血のマイナスは地方で平然とプラスされる。

一國全體としては變なものである。

自分の案としては、先づ大都市の要分散商業人口をその新興都市に代入せしめる。

即、大都市商業人口をしてその優先商業人口たらしめる事を提唱してゐるのである。

とまれ既に序曲は初まつて居る。

誤りなきと同時に果斷なる指導が必要にせまられてゐるのである。